

山とスキー

第四十七號



札幌山とスキーの會發行

大正十四年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十四年二月二十八日印刷納本

大正十四年三月一日發行
(每月一回)

第四十七號目次

記事

拔章

峠

大島亮吉 (一)

カラー先生を憶ふ

中野誠一 (二三)

山地に於けるスキーの實際

加納一郎 (一六)

第一回全國中等學校スキー選手權大會

(一八)

彙報抄錄

〔全日本スキー聯盟の成立〕
〔全日本スキー団体總覽(一)〕

寫眞版

滑降のスタート

水飲法

拔章

道の邊の杉苔が非常に美しい。エマソンがいつた様に自然の美は高山大岳に限られるのではない、隨所に在る。杉苔の高低起伏の状を見ると宛として一個の小森林である。青い苔の中に赤い菌がある。万緑叢中紅一點の趣はここにも鮮かである。ほの暗い薄暮に木の下道をたどり行くと、草叢の中にほのかに白い夕顔の花ともたぐふべきものは白い菌である。これも亦美しい。

大きな椀大の菌が道の真中にころがって居る。その黄色にむさくなつた屍をせめて叢の中へ隠してやらうと、下駄で蹴こまうとするに、可哀相にぐだぐだにこはれて了つた。私は思つた、かかる菌にも尙生きがひがあるのであらうか。朝に咲いて夕に爐中の灰さなる草に生きがひがあらば、この菌にも生きがひはあるであらう。私はそれを信じたい、それを實感したい。

— 安倍能成 —

峠

1

大 島 亮 吉

山にのほる者の心を最も強く惹きつけるものはなんといつても峯の頂だ。けれどその頂と頂との間の低い凹みを言ふ峠といふものにも私たち山にのほる者の心を惹くに足るものが幾分はあるやうに思へる。ことに私たちがたゞ山にのほるを愛するほかに、また山々のなかをさまよひ歩くことや旅人のもつ心を多分にもつに於ては特に然るをおほへる。

山登りにはいろ／＼の方面が含まれてゐるやうに私には思へる。勿論その主な部分は山をのほることそれであらう。しかしこゝにいふ「峠越え」や或ひは單なる山地の「さまよひ歩き」といふやうなことなど、必ずいふぶん古くから多くの山をのほる人々によつて行はれた。ことに峠越えは山登りのはじめをつつたものだ。一體山の頂とか峯の頭とかはずつと近代になつて山登りといふものが起りはじめた頃になつて漸く直接人間とのあひだに交渉がついて來たのであつたが、峠といふものはずつとそれより以前の往昔から人々の心を惹き、また實際それと直接の交渉はあつた。例へば古へのたゞ征服慾にのみ驅られ燃えた多くの戦將の心は、どんなにかあの山々を越えたその向ふの豊かな平原の國にはしつたことだらう。彼れ等は終ひにその山脈のあひだのいちばん低い凹みに凝つと眼をつけた。そして部下の軍をひきつれてある機會にその凹みを越えた。歴史はよくそのことを私たちに話してくれる。神に對する敬虔な心と熱情と忍耐とを以つて聖市をめざして急ひだ中世紀の巡禮者もまた、しづかに口洩る巡禮の歌をかすかに街道の空氣にひゞかせては雪深いアルプスの峠に行

き惱みつゝも、それを越えて行つた。口碑がよくそのことを私たちに物語つてくれる。未知のもの、知られざるものを恰も初戀のやうな熱情をもつて愛し求める純潔な好奇とあ、がれの心を抱いて北歐の若い旅人は、アルプスの向ふ南の國の明るいつたかな自然の風物ミ、その華かな羅甸の文化ミを慕ひあこがれつゝ、おなじやうに峠をこえた。獨逸の詩人はそう歌つた。それらのアルプスの山波をこえてゆく数々の街道は、實に「羅馬への道」とよばれてゐた。それからすつと後になつては近代的の旅行者や登山者がまたその街道を峠や、或ひはまだ彼れ等には新しいいろ／＼の峠をはじめて越えることが行はれた。「山は自らなる境をなす。それでも人は山を越えずには居られない。」といふ言葉はたゞに古へのみにあてはめらるべきものではないだらう。

それではその近代の旅行者や登山者は一體どんな心をもつて、それらの古い峠や或ひはまたたゞその土地に住む人々にのみ知られてゐるやうな峠や、或ひは全然新しい山の凹みを越え歩いたのであらうか？ 山の頂をのほると云ふこと以外に、この峠越えといふものに就て、山登りやまたは單なるさまよひ歩きとのあひだに私たちはなにを見出すことが出来るか？ 洵に登山の歴史の第一頁もまた「峠越え」をもつてはじめられてゐるのである。

「山の峯は自然によつて創られた。けれど山の峠は人間によつて創られたのだ。言ひかへてみれば、山の峯は自然の現象だ。けれどもその峠は——この場合の「峠」の意義は單に山の峯と峯とのあひだの低くなつた凹みを言ひ表はすものとして用ひられてゐる——たゞ以前より明らかに自然は人間に示してはゐるとはいへ、それが人々によつて越えられるまでは、「峠」ではない。人は純然たる實際的理由のために古くからアルプスの氷河の峠を越えたが、その後ある特別の導きのあるまでは高い峯々を登らうとはしなかつたのだ。けれど峯の名は峠の名よりも早くから人によつてつけられてあつた。人は平原からきはだつて望める峯には、それを登らないすつと以前から名をつけてゐた。しかし人は峠を實際に越えた時でない、それに名をつけることはしなかつたからである。最初、峠は人によつて徒歩で越えられた。それは非常な勞苦を費されねばならないものだつた。けれどもそののち峠をこす旅人のためにその峠の頂のうへや或ひはその頂の近くに修道院のホスピスが設けられた。それからまた時が経つにつれ、次第に徒歩の小徑が改良されて、ある時は馬の通れるほどの路にあるときは驛馬の通れる輻道になり、十八世紀になつては立派な車道までにかへられてしまつた。そして現在は峠路の發達の第三階梯にあつて、アルプスをこえることは以前に比してすつと／＼勞のすくなく、また危険もない

ものとなつてしまつた。峠をこえたり、廻り道をしてゆくかはりに、今ではトンネルがその横腹に穿たれてゐて、近代の旅行者は快適な寢臺車に横になつて、どんな山中、または村、谿、平地をも瞬間に馳けぬけて、そのかみの先蹤者をおのゝかせた「美しい恐ろしさ」をもつた大きな風景を夢にもみずに、たゞ没趣味な風景の切斷面をば車窓から望見してアルプスをこえてゆくのである。然し乍ら、それ等のものはなれて、「旅そのものをたのしむための旅」*Pleasure-Travelling*といふやうな近代的の傾向や、それにつゞいて山々を登り歩くひとつの傾向がはじめらるゝに到つて、以前より知られてゐた古い峠路とともに、またたゞその土地に住む人々のみに知られてゐたより、高い、或ひは寂しい幾多の峠や、羚羊狩りの獵師たちのみが、時たま越えたりするやうな氷河の峠などが、山々のあひだの寂しい谷やそのみなかみに聳える峯などどまじりしく旅行者や登山者に對してまた新しくひらかれてきたのであつた。」

2

こいふのは登山史家クーリツヂによつて、アルプスに於ける峠の歴史を簡單にのべたにすぎない。けれど峠こいふものが、どんな風に近代の「旅行者」や或ひは「登山者」の心に對して觀られてゐるかは、彼れによつては遺憾乍らすこしも言及されてゐない。

一體、人によつては前にのべたやうに外形的では「旅行者」とか「登山者」さかと、これを區別してゐるが、しかしこのふたつのもので根底をなす心持は、即ちいひかへれば「旅するの心」も「山をのほるの心」も、それには決して劃然とけじめすることはできないほどに、相近づいてゐるものではないかとおもふ、尤もその「旅行者は汽車や自動車にのつてたゞ各地のホテルを泊り歩く所謂漫遊客をいふのではなく、背には食料其他の一切を背負ふて、街道から山のなかの小徑まで、谷から谷へこ峠を越えては、きまゝにさまよひ歩くやうな旅行者をいふのであつて、これをより明らかな意味の外國語でいふとすれば、*Tourist*ではなく、むしろ *Traveler* に近く、その意味は漠然としてはるるが、*Wanderer* といふ言葉が最もそのやうな旅行者の態度や氣持を言ひ含んでゐるものとおもふ。であるから往昔の登山者といはれてゐる人だゞ山の頂ばかりをのほることを目的とし、またそれを實行したといふ人は殆んきないといつてもいゝほどである。現在

の登山者にもそういふ人は多いが、その傾向は次第に別の意味で行はれてゆくのである。多くの人は、山をのぼると共に静かな人氣のない、あるひは自分のいまだ知らない土地をさまよひ歩きたいといふ心持も持つてゐるのである。多くの山に登る人は、つまり、「山々をさまよひ歩きたい」といふ氣持をもつてゐる。旅をする人は、いろいろの條件で、激しい努力や特殊な知識や經驗などの要するためや其の他の事情のために山に登ることができないから、やむなく旅をしてゐる人がきつと多いとおもふ。どちらの人もみな、ともに自然に對して敬虔さ、誠實さをもつ人々なのであらう。それ故、以上によつて私はこゝでは旅行者と登山者とは、これをひきつもののみみて置いて、山登りのうへに於ての「峠越え」といふものに就てみることにする。

すでに山登りの方法には、廣い區域に亘つて峯々を登り、峠をこえて、各山地を歩いてながい山を旅をするやり方と、ある中心に根據を定めて、その周圍や附近の峯々を巨細に登つて、なるたけ峠をこえるやうなことを避けるやり方とがあることは私等によく知られ、また現に行はれてゐることもである。前のやり方を、例へばクーリツヂは漂流主義 (Wandering) とよび、後のやり方を中心主義 (Center-dwelling) とよんでゐるし、ごく近代的な登山者としては例へばマーセル・クルツツなどは、前者を「Franchi」(越える)主義、後者を「Rayonner」(放射する)主義だなど稱へてゐる。クルツツの方は同じやり方は言へ、その範圍をごく狭くみてゐるもので、全然登山そのものを主として、そこに「さまよひ歩き」といふ氣持は甚だ隱影の淡いものとなつてゐるのである。これをすこし詳しくいへば、彼れのやり方はたゞ高い山上の登山小屋を利用するの範圍にとゞまるもので、すなはち「Rayonner」とはあるひとつの登山小屋を根據と定めて幾日も滞在しつゝ、天候をみてはその周圍や近くの峯々を詳しく登ることをいふので、その名稱によつて來るところは、ひとつの登山小屋を中心としてそこから放射狀的にその周圍の峯々に向つて行路がとらるゝところからきてゐる。そして「Franchi」の方は、山上の登山小屋から登山小屋へと、峯を傳はりこえ、あるひは峯と峯との間の高い鞍部、氷河の峠 (普通前者は Jooh 後者は Tische さいふ特別な山岳語で明らかに示されてゐる) などを越えてゆく方法で、その越えるといふところに名稱は起因してゐるのである。そしてクルツツはごく新しいスキー登山法の場合には主として前者の放射主義が最も適當であることを言つてゐる。

ところが、クーリツヂのはそうではない。彼れのいふのはもつとずつと範圍の廣いもので、即ち純然たる山登りとたゞ

寂しいところ、人氣のない場所をさまよひ歩くといふことの二つを含めた範圍であつて、こゝで私の言ふもゝに適當した分け方なのである。彼れのいふ中心主義とは、登山者がひとつのシーズンの山登りのためにある地域をえらび、その谷にあるホテルなどを根據地と定めてその近くの谷々の峯を登り、峠越えをして他に移ることをしないものをいふのである。であるから中心主義では峠越えを好まない結果として、峠越えのたのしさも知らず、また「さまよひ歩き」のきまゝさをも欲しないものである。これは近代的なひみつきの登山傾向であつて、登山の發達推移の結果として必然的なものと看做されべきものである。それではこゝで主題をなすところの「さまよひ歩き」と「峠越え」についてみてみよう。

3

「峠越え」の愉しさは、きまゝにさまよひ歩く旅の面白さのなかに含まれてゐるのである。山にのぼるものゝなすワンダリングといふものについて、まづエツチ・イー・デイ・テイ・インダルはオクスフォード・マウンテンヤリング・エツセイに寄せた「登山者と巡禮者」さいふ彼れの小さなエツセイのなかで憊ふ言つてゐる。「古への巡禮者は決して今日のやうな、單なるホリデー・メーカーとは同一視することは出来ない。否、それ以上、實に彼れ等のその氣高い旅の目的と、その旅をする態度に於ては「理想的な旅行者」である。彼れ等の旅はその最終の目的をそこにしてはまつたくの自由な旅だつたのだ。彼れ等は飽くまで旅といふものゝ自由さとそしてその辛勞とを味つたのであつた。アルプスの峠も彼れ等は越えた。われ等は今日に於てはこのやうなわれ等が古き旅人の姿をいづこにも見出すことはできないのだ。けれどもなほたゞひとつわれ等は今日に於ても「山登りの旅」Travel in mountainseingのあるフォームに於てのみ、辛じてその面影を見出すことができる。それは現在に於ての旅行の理想的なフォームだ。そこにはかの古への巡禮者が抱いてゐた心さよく共鳴するあるひとつの心の遺形がある。その理想に依つて私は登山者をもつてまた「近代的な山地巡禮者」とよぶに躊躇はしない。それならば、どんな態度のものが、この自然の殿堂である山を屢々詣でる新しい巡禮者とよばれ得べきだらうか。その昔、雪ある峯をはじめてよぢのほつて、その頂に後の信仰者のために一堂を建立した、かのアステイのポニファースのその足痕につきしたがふものでなければ、實際にこの巡禮者であらうとよばれ得る資格はないのだらうか。そのか

みの巡禮者のもつたその目的は旅に於てのその心境に對して、一八六〇年代に於てはじめてアルプスの多くの峯々を登つたわれ等が先蹤者であるそれらの幸運な人々の態度も、實際に於ては甚だしく巡禮者のそれと似通つてゐたのである。彼れ等は峯をよちのほるこいふことよりは、ある場所からある場所へと、まづ峠をこね歩いてゆくやうにして、その當時未だ多くの人々には知られてゐなかつたアルプスの奥まつた谷々をさぐり歩きに出掛けたのだつた。彼れ等は彼れ等のその目的と耐忍と、そして特に旅する態度に於て、古への巡禮者のもつてゐた精神と融合すべきあるものをもつてゐたのである。」

更になほつゞいて、エヌ・テイ・ハツクスレーもなじく一九一二年度のオクスフォード・マウンテニヤリング・エッセイスのうちで、彼れの寄せた一論文「峠」のなかに於て言ふのに、「往昔のマウンテニヤはみな一面に於てはワンダラ一であつたが、今日の登山者は主としてスペインリストだ。これらの歴史的な、時代的な傾向には、われ等にとつては直ちに了解することが出来るやうな、極めて明白な理由がある。往昔に於ては、いまだ今日のやうにアルプスに對する地誌的な、山岳誌的な知識が、まだ一般的でなかつたからしてそれ等の初期の登山者等は、おのずからある地方の人の知らぬ無名の峠などを羚羊狩りの獵夫や牧人などを案内者として越えつゝ、古い地圖の數多の誤記を訂正したり、新しい地圖をつくつたりしたので。そのやうな時代には、旅する心や未知の土地をさぐり知らうとする心が、彼れ等の多くを誘つた。實に彼れ等は地誌的な知識を得るといふ目的や興味のためにまた峠越えをやつたのである。峠越えは實際にその點では面白いものである。景色は一時間ごとに變つてゆく。そして終ひには長い登りの單調な歩みも終る。視界は一時に開ける人は峠の頂のたゞ一瞬間の展望によつて、その地方のトポグラフィに關する概念を、最もよい展望をもつたその地方のより高い山頂に於ての一時間の眺望に於けるよりも、よりよくつかむことが出来るのである。登山の歴史が峠越えによつてはじめてられたと同じやうに、また登山者おのの經歷も多くはこの峠越えによつてはじめてらるゝのである。」

以上のやうに峠越えこいふものは、登山者にとつてはいろいろの興味と實益とを與へるものである。そしてそれはまた登山者の多くがもつ「さまよひ歩き」といふ氣持と固く結びついてゐるものなのである。これらのことは私等も知らず知らずのうちに経験してゐることである。例へば私自身のごくつまらない例をとつても、それはすぐにうなづかれる。私が秩父を知るためには、まづはじめは多磨川を上つて柳澤峠をこえて甲州にでたことや、氷川の奥の仙元峠をこえたりした

ここからはじめられて、次第に峠越えを重ねて、それからほんとに奥秩父の山の頂なり、深い澤なりにすゝんでゆくやうになるのである。山の頂をどしどしと登り得るほどに知識をもつことができた時分よりも、私には却つてまだ峠などを越え乍ら、たゞ地圖のうへで想像して描いてゐた山々や谷々の姿をいぢ〜現實に眼にして、それまでは死んでゐた地圖のうへの等高點が、忽ちにして生々としたレリーフ・マップとなつて私の頭にはいつて來るやうに感じられた頃の方が、ずつと興味の深いものであつたとおもつてゐる。峠越えの方が頂に登つたことよりも却つてたのしかつたのだ。これとおなじやうなことを言つてゐるのはテイ・エッチ・ホームズである。彼れは一九一三年度のスコツティッシュ・マウンテンヤリング・クラブ・ジャーナルにのせた彼れの小論文「山地漂流の心理」(Psychology of Hill-wandering)のうちで、純登山 Pure mountaineering と山地漂流 Mountain-wandering あるひは Hill-wandering についていろいろと言つてゐるが、彼れはまたヒル・ワンダラーの「峠越え」の愉しきについては慙ふ言つてゐる。

「いろいろの事情が、ある人をしてクライマーにまではゆかしめずに、たゞ彼れを氷河のない低い草の斜面までに限られた山地の漂浪者、すなはちヒル・ワンダラーであるにまゝまらしむることがあるのは止むを得ないことである。彼れは彼れの山に對する熱情を岩と雪のみの高きまで運ぶことは出来ない。彼れは、彼れ自らの四肢をはげしく苦しめつゝ、多くの休息もとらずに峯々の雪を刻みつゝ登つたり、あるひは大きな岩壁と取組んだりして、その間に危険と疲勞とそしてそれよりより大きな喜びを味ひ、その荒々しい、憔悴し切つた身體の疲勞も、彼れをして谷の低きにかへらしめたときには美しい幻想であり、その谷に下りてのわづかの休息が彼れにはこのうへなき贅澤であり、大なる報酬であるさういふやうに感ぜしめらるゝほご、深くそして親しく山にふれることは出来ない。彼れはたゞ谷に住む素朴な抒情詩人である牧人や山人の作つたその俚謠やひな歌によつて、山々の高きに於てのみ味ひ得るそのたのしさや、壯大な風景を偲び、エメラルド色の氷河の寂寥さや、綠色の眼をしてゐるそのクレヴァスをはるかに下の牧場の草原に座つて見上ぐるのみである。けれど彼れは彼れ自身に對してまたひとつのひと知れぬたのしさを味つてゐる。これらの人々がもつヒル・ワンデリングの心理には、純然たる登山者の多くが求め得ないひとつの穩かさ、自由さとそれに伴ふ秘めやかな喜びがある。……彼れは山頂に登るかはりに、それよりは低い、容易な峠をこえる。彼れは登山者よりはもつと強く山の空氣とその景氣とを愛してゐる。彼れはある谷の小さな山村の寂しいホテルに泊る。朝には、その谷の流れをさかのほつて、牧場の小徑や樫の

森のなかの山徑やまみちを通り過ぎつゝ、はるかかの峯と峯との間の凹みへこのほつてゆく。一步ごとに景氣は大きくなる。山腹の崖や、雪の斜面が次第に彼れの眼に迫つてくる。氷河より滴り流れてきたばかりの谷川の水は、次第に音高く、岩に激してくる。村が見下ろせるやうな高さになつた。教會の白い尖塔いたたが日に光つてゐる。牧場の緑色がかゞやいてゐる。そしてしかも峯と峯との間の峠の、その深い凹みの描くカーブの優美さとその *Verticality* とに彼れの心は惹かれてゐる。……夕べには彼れは流れに沿ふて谷へと下りつゝある。これから下りてゆく谷にそのまはりの峯々などの地形は、彼れには彼れのポケットにはいつてゐる地圖のうへのデッド・ラインでみるよりも、もつとはつきりと鮮やかに彼れの頭のなかにをさめられてある。なぜならば、彼れは今日峠の頂上から、この地方の生きた大きな地形レリエフ、フォームをしたしくみてゐるからである。彼れはたつたひと目みただけでも恐らく永い間その模形圖の複雑な地形を忘れることはないだらう。また樅の森のなかの小徑や牧場の草の上を徑は流れについて、最も容易たやすい處を下りてゆく。彼れは毎日するやうに、また彼れの心のなかでいろ／＼と今晚泊るこの谷の村のことや、その村に住む人々の、今朝出發してきた村のとはちがつたその珍らしい身装りやわかりにくい方言のこゝなどをたのしく想像してゐる。」

またマンマリイはその著「アルプスに高架索に於けるわが登攀」のなかの一章である「ある高架索の峠」のうちで、「私が高架索の未だ何人も登つたことのない巨峯の頂を踏み得たときは非常な歡喜であつた。エルブルウスをのぞいては私はヨーロッパの最高點に立つたのである。アイスアックスをふりかざして私も、ガイドのツウルフリユウも悦んだ。けれど私はまたこの高架索の高い、そして荒れ寂れた氷河の峠をこえては、そのあひだに横はる廣大な谷々の原始林や、そのなかにかくれたやうな韃靼人たたらじんの村々などを訪れたりしたときのたのしさも決してそれに劣るものとは思はない。……これらの峠は現在ではたゞその谷々に住む韃靼人のうちでも、ごくわづかに越えられるほどのもので、その人間的交渉に於ては、アルプスの峠のあるものには比すべくもないほどすくないのであるが、しかし古へにさかのほれば、このアジャとヨーロッパとの間を阻むこれらの大山脈の間のネーティーズ・パツスは、いろいろと今日の歴史家の明らかにし得ない歴史をもつてゐる。今日の高架索民族の多種で、且つ東方との混血の甚だしいことはその幾分を物語る。古き亞細亞の文明が、この高き、氷河に蔽はれて、現在は全く見棄てられた高架索の峠を越えたことがあるのである。いまその寂寥と荒廢を極めた、わづかに峠さしての命脈を保つそれらの山脈の凹部デプレッションの雪面に、この鉄靴を履いた西方人が、またこと新し

く、その足痕を印することゝなつたのである。……」

このやうな峠についての記述は、求めたらなかくつきるものではない。邦文のものを全く省はぶいても大へんである。私
のこゝに於て求めたことは、山に登るものには、峰の頂と同じやうに、その峯と峯との間の凹みである峠も古くより登山
者の心を惹き、峠越えがそも／＼登山者の経歴のはじめをなし、なほ今日でも峠越えは自分には未知の土他をさまよひ歩
くことを好む人々には、深い興味をつなぐに足るものであることを幾分なりとも、以上の人々のごく一部分的な記述によ
つて知つて貰へればとおもふことである。しかしこんなことはすでに旅行をする人や山に登る人には無意識のうちにも知
られてゐることであつて、今更言ふほどのことでもないと思はれる。が、たゞひとつすこし横道のことではあるが、ついで
にこゝで知りたいのは、登山者がつ純なる山をのぼるさいふ氣持と、たゞ山々をさまよひ歩くとはいふ氣持とについて
の登山者の見解である。勿論多くの登山家は、まことの登山者はこのふたつの感情を併せもつものでなければならぬとい
言つてゐる。しかし恠あやましいふこゝを云つた人々は、例へばジョン・ボールやムーア、フレツシユフィールド、クーリツヂ
のやうに自ら親しくアルプスや其他の山地の地誌的な知識を得るために、まだ登山者には未知であつた多くの峠を越え
りして、所謂峠越えのほんとの興味を味つた初期の登山者である。けれど地誌的知識が発達し、各々の谷々も開けて、峠
々への登路などもすつかり解つてしまつたほどになれば、自然そういふ意味での峠越えの興味は甚だ薄れて、今度は例へ
ば前提したホームズの言つたやうな態度のものが味ふやうな峠越えの別種の面白さに移つてゆくのである。そういふ態度
でみれば、峠越えにもまた今尚ほ深い味のあることは、私らの意を止むべきところではないかとおもふ。要するにこれも
私他の機會に於て書いた「ピークハンティングより靜觀的な態度へ」と同一の経路のひとつの小さなあらはれに過ぎない
たビヒル・ワンダリングはこれとは全くちがふ。これは恰度英國の登山家の多くが、スコットランドやウエールスの山地
或ひはアトランチック・コーストの島々に於ける、海岸沿ひの斷崖や低いザーランドの間にあるロツクホやデル、グレン
の岩壁などでのロツク・クライミングをみると同じ態度でみるべきものであらう。これらのブリツテイツシュ・ロツク・
クライムは、登山家に依つてはこれを「登山ではない」(“Not-mountaineering”)としてゐる。同様にヒル・ワンダリング
も勿論登山ではないといふことは、この點から推しても云へるだらう。だゞ大きな峠に登るための、即ち登山するための
素地として大いに練習する價値のあることを、一流のマウンテニーヤが言つてゐるのみである。

このやうにヒル・クライミングとヒル・ワンダリングが、山登りであるといはれやうが、いはれまいが、そんなことは私等にとつては少しもかまはないことではないか。登山者といふ文字を冠し得る人は、このやうな人でなければならぬなど言ふことなきは、全くつまらないことだ、ある一部のマウンテニヤが自らをより高く階級づけるための偏狭卑少な、悪く言へばクちな考へからでたものであると言ひきつてしまふ人は、私等のなかにもたくさんゐることにあらうとおもふ。私の目上の人も、それは英國人特有な偏狭な點だと云つてゐる。(英國の登山家のみがそう云つてゐるのではないが英國人に最も強い主張者がたくさんゐることは事實だ。) 私はじめはそう思つてゐた。けれど今日の大登山家と言はるゝ人々の多くが、眞面目にこんなことを言つてゐるのを度々讀んで私は少し考へざるを得なかつた。そして漸く其らの人々の言ふのは、決して前述したやうなそんな卑俗な望みからでゐるものでないことは考へられた。けれどそれ以上のことは私などには言へないことだ。一体に山登りといふものは極めてインデヴィジュアリスチックな性質のものと、私はみる。人もみてゐる。従つて登山家もなかなか單なる登山の記録や山岳誌的な記事さへ書くことはしない。まして、それ以上深く突つ込んで山登りの形而上學的のサイドについては殆んどなにも書くことをしない人が多い。彼れ等は著しくその點では沈黙的である。ある若き登山家さへも、古き或ひは自分より年老ひた登山家等に對して、慙ういふ言葉をもつて嘆じてゐる。——「一般的に言へば、殆んどすべてのマウンテニヤは、他の者を自己の仲間に導き入れるといふこととについてののみならず、なほ彼れ等の驥尾に従はうとする熱心なものに對してすらも、著しく不満足で、あきたらない態度の人々である。」——と。

そのやうなマウンテニヤといふものが、特に前述のやうに、登山といふものゝ範圍を限定したり、マウンテニヤの資格を云々したりすることは無理もないやうだけれど、私にはまだそこになにかしら深い根據がなければならぬ様におもふしかしそのやうなことは私ごときにはわからない。けれど私はその言葉に従つて行こうと思つてゐる。これから何年か山をたえず登りつゞけてゆくことができたなら、きつとその言葉にうなづきを與へらるゝやうな時があるかも知れない。またそのうへ、これからはこれまでのやうな主として單なる山登りの外面的な研究より進んで、深く内省的な努力に入つて「山登りとそのメタフィジックス」についてのことが、多くのマウンテニヤに依つて言はれやうとする傾向を窺ふことが出来るやうな輓近の言葉がある。即ち、最近に到つて、ドナルド・ロバートソンはアルバイン・ジャーナル誌上で、既往の

コラー先生を憶ふ

中野 誠

コラー先生が逝つた。嘘の様な気がしてならない。けれども事實は何とも仕方が無い。もう私達はあの何時もクラールなハイテルな顔を見られないが、雪の街札幌の大学生の何百否何千かに残して逝かれた先生の人格は、學校の創始者ドクター・クラークと共に永久に消えない影となるだらう。又我々スキーを楽しむ者にとつてはわけても在りし日の先生がしのばれる。暫らく先生を憶ふ爲、此の紙面をけがし度い。

明治四十三年レルヒが高田にスキーをもつて來た。それで、今でも高田はスキーの發祥地だと云ふ何の意義もない誇りをもつて居る。スキーが高田から始つた云ひ度いなら何時でもその説に賛成する。それがどこであつたつて將來のスキーの發達に何等影響が無いから。然し日本のスキ

ーが高田で始まつた處が札幌のスキーは北大のコラー先生に始まつたと思つて居る。只自分達だけで思つて居るので決してスキーの發祥地を他に強くないから高田の人達は安心するがよい。

コラー先生はレルヒより二年早く、明治四十一年に命を受け、四十二年の夏スウイスのチューリッヒから札幌農學校に赴任せられた。そしてその後すぐ本國からスキー一臺をとりよせられた。四十二年冬の雪の日初めて札幌農學校の生徒がコラー先生のそのスキーを履いた。但し履いたので滑つたのではない。農學部のY博士は獨乙語の天才だつたかしてコラー先生に可愛いがられた。そのY博士が初めてコラー先生のスキーを履いて先生自ら繩でY博士を曳張つて走られた相な。それを窓から見て居られたK博士の奥

さんがお腹をかゝえて笑はれたと云ふ。これはY博士の直話である。そのスキーは諸國式で後に今鳥取高農の教授になつて居るS氏が貰はれたが何でも丸山で折つてしまつた相である。その次の年コラー先生が本國から二三の書物を取りよせられた。私達北大スキー部は斯くして生れて來た

コラー先生は四十二年から大正十四年の十七年間、札幌に居られたがその間に明治は大正になり、札幌農學校は東北帝國大學農科大學になり、三轉して北海道帝國大學になつてしまつた。コラー先生はすつかり頭が禿けて一見五十以上の人の様に見える様になつた。その間に二千餘の學生が先生から獨逸語をおそわつたし數十の學者が論文の誤記を修正してつた。歸化こそせないが完全な日本人に同化して居られた先生はよく獨逸人のミュラーと云ふ人と日本や日本人に就て議論せられた相である。ミュラーは尺八など云ふ樂器は野蠻なものだ云ふ、先生は尺八の穴とか竹の口とかは西洋人の眞似られない日本特有の深さがあると云つて日本人や日本を辯護した相である。ミュラーはその後獨逸へ歸つて日本の悪口を云つたり書いたりして居る相だがコラー先生は矢張依然日本の生徒の爲に身命を投げ出して下さつた。

コラー先生は生徒がどんな惡戯しても怒られたのを見た事が無い。そして先生自身も頭の禿けたにも似ない茶目で

あつた。聲も特別のトーンで氣持の良い美しさをもつて居られた。それで教室でよくエルルケーニツヒやローレライを一節だけ唄つて聞かされた事もあつたし又日本人でも思付かない様な洒落を日本語で飛ばしたりせられた。教授法は獨特で他に比を見なかつた。ローランドと云ふ若い米人の教師が生意氣だと云つて私達のクラスの者が教室でその教師と喧嘩した事があつたが、その時ローランドは、自分自分のベストを盡して教えて居る心計だから此上責めて呉れるな、そして自分の教え方とミスター・コラーの教え方を比較して呉れては困る。ミスター・コラー程の外語の教授法の名人は日本中には無論なく、世界中にも少いからと云つた事すらあつた程コラー先生は良く生徒を教えられた。

コラー先生の努力は、勅任官取扱と勳三等とでむくりられた。學校の先生で勅任官と云へば獨逸の *Gehesmonat* と云ふ處だ。M博士がコラー先生の故郷を訪ねられて、ヘルコラーがゲハイモナートになつた云つたら、皆の人が涙を流して嬉しがつた相である。青山温泉の合宿で、コラー先生がヘル・ナカノは何班長ですかと聞かれたので、ブロークンな獨逸語で *Keine Sektion habe ich* とやつた時、わざと驚いた風をして、*Hooooli Obegenerr!* と云つて皆を笑はせた。それからスキーの姿で會ふと私をよく *Herr*

Ober-General "Kakano" と呼ばれたものだつた、先生が勅任官取扱になられた時、次の機会には是非 "Herz Gahneimant Professor Koller" と呼んで驚かそうと思つて居たのにその時を得ない中に逝かれた。

思出せば極がない。然しも少しスキーのコラー先生を語らして貰ひ度い。

コラー先生のスキーは札幌での皮切りだつたがその後は一寸も滑られなかつた。そして初めてスキーを履かれたのは大正十年の十二月だつた。そしてその時、今京大に居られるN教授と一緒に青山温泉の合宿に來られて、若い連中と一緒に朝早くから滑り辨當も同じ鹽鮭のお菜で、ライスボールを喰つてやられた。

次の年、スキー部は先生にモノグラムを呈した。スキー部のモノグラムは有数のランナーでないとつけられない。それを先生が貰はれて大變喜ばれたが、テレマークが出来る迄は着けないと云つていつも上衣のポケットの中に入れてもつて歩かれた。何でも無い事の様だが先生の人爲がよく判る。

『Ski-Hail』と云ふ言葉の使ひ途を私達に初めて教えて下さつたのも先生だつた。昨年高田の大會へ行つて、見送りの人達と別れる時『Ski-Hail Takada』と云つて高田の人達を喜ばせたものだつた。

死ぬ迄スキーの話をして居られた相だ。クリスチアニアが出來ると云つて喜んで居られたと云ふ事を聞いた。思出をたどれば限りが無い。此位で筆を擱く。

H.U.S.V. 近着圖書

British Ski Year Book (1924)

Paa Skidor (1924)

Der Winter 18 Jahrg. 4. 6.

'Ski' 16 Jahrg. 8. 9.

AAR BOK (1924)

Das Klettern im Fels v. Franz Nieder.

Der Rodel Sport v. Dr. A. Rziha.

山地に於けるスキーの實際

加 納 一 郎

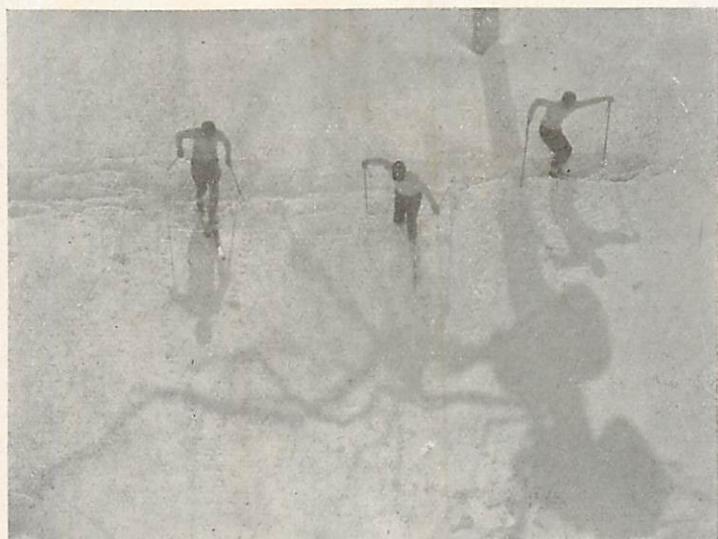
滑降のスタート

山地旅行の際には主として地形の起伏に従つて、登降を行ふのであるから、滑降のスタートは多くは丘頂又は平坦より下降の斜面に移り、自然行進方向に滑降し得るものである。また斜面の斜登行中より滑降に移る場合、滑降が直滑なるの要あるときでも一時斜滑をなして漸次此に移り得るものである。而しながら次に記す様な事情のときには、ジャンピングターン (Jumping Turn, Quesprung) による出發方法を採用するのが最も有利である。

即ち斜登行より直ちに直滑降をなすの要ある場合で、此は例へば、前方に中間方法たる斜滑降、其を行ふの余地がないと云ふ様な、地形・地被物の制限を受けるとき、或は時間的に可成的速かに滑降を要するときなどである。殊に

後の場合を更に具体的に考へれば、急にコースを變更するとき、勅助、傳令等時刻を争ふ場合、更に上方よりの雪崩押出しを廻避する場合には此の方法により他に良策はないのである。

ジャンピングターンによる直滑降のスタートは寫直に示す様に三段に見ることが出来るのである。右端は此の準備姿勢を示してゐるものであつて、スキーは水平の位置にあり、体は最大傾斜線の方向、即ち滑降せんぞする方向にむかひ、山側の杖は前方に、谷側の杖は後方に、而て膝を屈して跳躍の準備をなすのである。次に膝を更に屈して足先を引つけ、兩杖にかけた手によつて廻轉の支持を助け、新方向に於て着陸すると共に滑降するのであつて、中央はその着陸姿勢で、云ふまでもなくテレマークポジションとなる。此のまき廻轉の外側の杖は内側のよりもより早く雪



滑 降 の ス タ ー ト



水 飲 法

面を離れて体に引きつけられる。かくして着陸の後はその勢で直ちに滑降することとなり、左端の様に普通の直滑降の姿勢にかえるものである。

此の方法の特長は時間的に利益があるのみならず、狭い地域に於て行ひ得ることであるが、之を行ふ實際に當つて注意しなければならぬことは、平地に於ける廻轉と異り跳躍の際、スキーが着陸面となるべく平行する様に足先をさける心掛けを忘れてはならないことである。此は特に斜面が急で、また新雪が多く、スキーが雪面上に沈むこと深きときに、スキーの後端が雪面に觸れて、廻轉の失敗を引をこすこととなるから注意しなければならぬ。また着陸の際は必ず兩スキーが平行でなければ次の滑降に非常に都合が悪い。そして着陸の際は前出スキーに体重が主としてかゝる。これは着陸後直ちに滑降し始めるのであるから体が後にのこされない爲に必要な條件である。此の姿勢で安定を得れば（それは短かい時間ではあるが）漸次体重を後スキーに主としてかける様に移すのである。

思ひ切りのいゝ跳躍によつて成功が齎らされる。可成り重いルウクサツクを持つてゐても、練習によつて此の方法に耐え得る様になる。たゞ此の際には廻轉後体が後に引かれ易い。前出スキーにかける体重の程度は傾斜角度と雪質による滑降速度に正比例する。

水 飲 法

雪を口にすることは原則的に避くべきである。一度試むれば、此の誘惑に打ち勝つことは甚だ困難であつて、次日は、あれた舌と唇との爲に苦しめられなければならない欲すれば限りなく與へ得らるる天恵の皮肉ではないか。

疲れては水を求むる吾々の爲に、冬季山間の小澤や溪流も、多くは雪の爲に蓋はれてゐて、夏の如く随所に之を求むることがむづかしい。稀に未だ完全に蓋はれず、雪面所々に孔を生じてゐる場合、或は下流に於ては、流水の音を聞き、又はその面を見ることが出来ても、之を得ることに苦しむことである。か様なときに、常に吾等の友であるところの二本のストックは此上ない方法を提供してくれるのである。

即ち水面までの距離が數尺に達して直接容器を以て、汲みとることが出来ないときには、ストックのリングに、雪塊を載せ、之を水面に浸せばよい。一本の杖で尙達しないならば更に他の杖を以て之を支持すればよい。寫眞の場合には兩杖を用ひてゐる。リングの雪は水に浸つて、直ちに充分の水分を含むからして、之を引き上げ、之の雪を吸へば含まれた水は容易に再び口に吸ひさらられる。一度用ひられた雪は吸水性を失ふからして、又新しい雪を用ひて反復

すればよい。

此の方法によればスキーを脱ぐことも、容易にこり出すこともなく、極めて容易に水を得ることが出来るのである。たゞ注意すべきことは、雪質によつて吸水性が異り、或は雪塊を水中に入れれば崩壊してしまふことがある。またか

くして使用した杖は其後、雪が附着して使用に多少の不便を來すことがある。但し乾雪なれば大したことはない。一寸した思ひつきではあるが、甚だ簡単に渴を醫して、元氣を得るものである。

第一回全國中等學校スキー選手權大會

主催 北大スキー部
後援 東京朝日新聞社

本大會の公表に先ち、些が本大會の前身について述べて見たいと思ふ。

已に本大會開催に際しては、各地に發せし案内状にも、明記せる如く、本大會はその前身を札幌中等學校スキー競

技會に置き、正にその延長に當るものである。而して今その前身の内容と形式を追想して見んに、その大様は次の表によつて知ることが出来る。

年	名	種	種	目	場	所	距離	レコード
1920	25/1	札幌中等學校スキー驛傳競走	アイスダンスレース	上	札幌、小樽間		30K. M.	5時42分37秒
1921	/1	同	同	上	同		同	3 32 9
1922	/1	同	アイスダンスレース	上	鹽川大曲		10K. M.	1 0 10
1923	/1	札幌中等學校スキー競技大會	同	上	同		同	54 15
1924	27/1	同	アイスダンスレース	上	Alphaschanze		同	12 m 80
1925	31/1-1/2	全國中等學校スキー選手權大會	アイスダンスレース	上	札幌郊外 Silber Schanze		10K. M.	16 m 30

何故斯様に名稱が變り競技種目が變へられたか、それは一言にして云へば、スキー界の進歩發達を語るものと云ふここから出来る。

抑々スキー競技としてその本質、價值、より考ふるならば、何人もデイスタンスレースとシヤムプ競技とに指を屈するであらう。而して吾等の先人が何故然らば最初からこの兩種目を選ばなかつたのかと疑問を抱かるゝ諸君もあらう、それは云ふまでもなく此處一、二年までと云ふものは未だスキーシヤムプが單に一つのスキーテクニツクとして考へられたるのみにて、競技としてのスキーシヤムプ熱が微力であつた。否餘りシヤムプなるものが遅々たる歩みを踏みつゝあつたのであつた。而して吾々の先人の意向を以てすれば第一回の驛傳競走さへ其敢行終了に到るまでは全く其實をあげ得るや否やと云ふ問題さへ大きな疑問であつたやうである。即ちデイスタンスレースとして舉行するにその走路の距離が三〇KMと云ふ長距離に涉つて居たからである。然し疑問は疑問として、斯道の發達の爲めにスキースポーツの振興の爲めに先づ第一步をデイスタンスに致せることは、言を俟たざるところである。

一回、二回、三回と毎年デイスタンスレースの成果は各方面に擧ぐるこゝが出来たれど、漸く兩三年中に認められて來たシヤムプ競技の、やゝもすれば中學方面のスキー

部に於て輕視せらるゝと云ふが如き憂ひの言葉を耳にするに到り、斷然一種目のみの競技の弊を一掃する必要より將來シヤムプ競技を行ふと云ふ様な意味から、一九二三年から前年までの名稱を改め愈々一九二四年に到りシヤムプ競技を選んだのであつた。此年シヤムプ一種目とせることは相當の理由のあることにて、此年に若しもデイスタンス競技とシヤムプ競技を同時に開催すると云ふことになるに參加者が派遣選手の爲めに可成り大きな負擔をせねばならぬと云ふことでもあつたし、又主催側としても兩競技を選ぶことは些か順當でないことと云ふところよりシヤムプ競技のみ行ふやうな事になつたのである。

而して今年に及んで兩競技を選んだことは、實際未だ幾分時期尙早かと云ふ様な考へもないではなかつたが、然し一步退く前に踏み出して見よと云ふやうな考への烈しかつた結果、斷然兩種目を選んだのである。

而して從來までの札幌中等學校と云ふことは、餘り狹義であることと云ふ見地から、全國的の名稱を冠らせて遂行することになつたのである。而も全國的とするには形式と云ひ内容と云ひ、又競技の實際に於て吾々としても可成り重過ぎたる仕事であると云ふことから、其應援を東京朝日新聞社に交渉せるところ、計らずもこの全國的催しに於て東京朝日新聞社の意向と一致し、吾が部が主催となり東京朝日新

聞社が後援と云ふことで、愈々改稱せられたる競技會の第一歩に足を踏み出した譯である

元來デイスタンスレースミジャムブ競技とは、全くスキースポーツの二大種目であつて、兩々相俟つて一つの大きなスキースポーツの大幹を形作るもので、全く兩者に輕重なく價値づけらるべきものである。即ち一方のみに於ける得點價値が過重にして、他の一方の得點價値が輕々に看做さるゝと云ふことは、全く意義のないことである。但し是は地方別的な、又は學校別的な団体競技の場合に於て其本質的意義が充分に表はさるゝと思ふのである。

斯様な意味から、吾々はデイスタンスレースミジャムブ競技の兩者の得點價値を同様とせしめ、入選六等までをとり、其得點を夫々上位より一〇、七、五、三、二、一とし兩競技に入選せる一校選手の得點總和の最高の順序により各校の優劣順位を定むる方法をこつたのである。

尙又競技會を二日間にとることについての理由は、説明するには、余りに當然過ぎる事柄で、若し別項に記してある競技方法を御覽になるならば、容易に二日間に競技を選ぶ必要のあることを熟知し得らるであらうと思ふのである。参加選手が兩競技に重複すると云ふことは、好ましくないことであるが、重複することは今日では尙よくあることとして、絶對的に避け得られぬ場合が多い。

而して若しも重複することが今日の場合通例的なものであると考へることを許して頂けるなら、この立脚點より二つの大きな競技が一日に時間を隔てて行はるるにせよ、兩競技に重複する選手の爲にも氣の毒であり、又競技の成績から見ても決して良結果を希ふ譯には行かぬ。つまりかゝる問題より推しても、二つの大きな競技を一日に行ふことは良くないことになる譯である。

今、今回舉行したる競技會の各参加校兩競技に表はれたる成績を見るに大體次の如くである。

學 校 名	10 キロ		ジヤムブ		總 得 點
	順位	得點	順位	得點	
小 丸 楳	I, II	17	I	10	27
小 丸 楳	0	0	II, III	12	12
小 丸 楳	0	0	IV, V	8	8
小 丸 楳	III	5	0	0	5
小 丸 楳	VI	1	IV	3	4
小 丸 楳	IV	3	0	0	3
小 丸 楳	V	2	0	0	2
小 丸 楳	0	0	V	2	2
小 丸 楳	0	0	VI	1	1
小 丸 楳	0	0	0	0	0
小 丸 楳	0	0	0	0	0

大會當日のコンデイションは別記しある如く、クロツスカントリールレースの日は、絶好にして雪質も前例を見ざる程良好なりき。

ジャムブ競技會當日は、別項の如く天候不良なりしも、寒氣きびしく斜面のコンデイションは、先づ良好なりき。

兩競技の成績より云へば、優勝せる樽商は全く競技の趣旨を遺憾なく徹底せるものと云ふべく、第二位以下の各校は全くチンバの競技法によつて得點を得たるものと見るこゝとが出来ぬ。即ち何れか一方の競技に於て優れたる成績を得て、得點して居るもので先づ第一回の催しとして、未だ兩競技がチンバ的に發達して居る爲にかかる結果に陥れるものと見るのが至當であらう。かかるチンバ的の得點を擧げたと云ふことは、其校に於て選手が粒揃いでないと云ふことを一面に於て示して居ると見ることが出来る。

本競技會が益々回を重ね隆盛に赴くと共に、兩競技の成績も亦白熱となり、各校に於て非常に接戦を見るであらうことは、吾々の容易に推測し得ることである。殊に競技會が二日に分れ、今年の様には毎年第一日目にクロツスカントリールレースが、第二日にジャムブ競技が行はるるものとすれば、一層結果の發表を見るまでは、優劣の順位を輕々に豫測し得ないだらうと思ふのである。

結局兩競技に粒揃いの選手を有すること、夫れが最も重

要なことになることは余りに明白過ぎる位な問題である。

(文責 廣 田)

競技會の後に

第一日目 一月卅一日(土)

岡村源太郎

一〇キロレース

クロツスカントリールレースは、ジルバーシヤンツエ前のスタート及びゴールを中心として、三角山ツツデ山より圓山神社裏に至る丘陵地に於て行はれた。コースは比較的平地多く、之に緩き登降斜面を加へ、一部分急斜面の登行及び下降を配し、特殊の地形の殆ど無い走り易きコースである。當日は前夜の降雪に依つて三角山附近は一面に新雪に蔽はれ、風殆ど無く、氣温低く、強く射る日光にも粉雪は全く朝の乾燥せる状態を終日保持して居た。競技日として絶好の状態を具有した日であつた。

午後一時半スタートは當部制定の規定に従つて、各競技者は一人宛一分間の間隔をおいて出發した。参加者は番外の北商選手三名を加へて合計三十四名、決勝點到着者は三

名であつた。各競技者成績は次の如くである。

- 一、片桐博(小樽商業) 四六分二五秒
- 二、今井誠一(同) 四七、一
- 三、内山良夫(小樽水産) 四八、一一
- 四、千葉毅(北海中學) 四九、三
- 五、安孫子六郎(札幌商業) 四九、三四
- 六、西村與三次(小樽中學) 四九、四五
- 以上六名入選者
- 七、後藤武人(札幌鐵教) 四九、五三
- 八、田中昇(小樽中學) 五〇、二六
- 九、青山政夫(北海商業) 五〇、四五
- 一〇、小西與志雄(北海中學) 五一、七
- 一一、末武魁(小樽中學) 五一、二三
- 一二、福田博達(北海中學) 五一、三九
- 一三、古屋保源(札幌商業) 五一、五四
- 一四、山上信太郎(北海商業) 五一、四〇
- 一五、山田相助(北海商業) 五一、五二
- 一六、計良武雄(札幌鐵教) 五二、五五
- 一七、正井瀧士(札幌師範) 五三、一二
- 一八、栗谷川平五郎(札幌一中) 五三、二九
- 一九、町田義人(札幌二中) 五三、四〇
- 二〇、貴田國勇(札幌商業) 五五、二八

- 二一、山本岩雄(札幌一中) 五五、三〇
 - 二二、橋本信明(札幌工業) 五六、三〇
 - 二三、戸倉一郎(札幌一中) 五六、三五
 - 二四、白井義作(札幌工業) 五六、五四
 - 二五、山崎由松(札幌師範) 五七、三二
 - 二六、近藤延雄(小樽水産) 五八、一
 - 二七、堀口逸雄(札幌二中) 五八、二二
 - 二八、徳光讓(小樽水産) 六〇、三九
 - 二九、私市元孝(札幌師範) 六一、三七
 - 三〇、吉村芳雄(札幌二中) 六二、二一
- 猶入選者の出發時間及び到着時間を示せば次の如くで、スタートは一分間おきである爲に、優秀なランナーはほとんど前走者を超走して行つたのである。

氏名	出發順位	出發時間	到着順位	到着時間	所要時間
片桐	28	2時1分	21	2時47分25秒	46.25
今井	14	1時44分	5	2時31分1秒	47.1
内山	30	2時3分	22	2時51分11秒	48.11
千葉	13	1時43分	6	2時32分3秒	49.3
安孫子	29	2時2分	23	2時51分34秒	49.34
西村	20	1時51分	13	2時40分45秒	49.45

参加者中、途中で杖を折損して競走の中止を止むなせ

られた選手、或は器具殊に復杖のリングの破損に依り比較的
的不成績になつた選手の數名あつた以外は、さしたる事故
もなく無事競技を終了する事が出来た。殊に前走者の超走
は極めてスポーツマンライクに行はれ、同時出發の際に見
る如き競技者間の索制等と云ふ事は殆ど認める事が出来な
かつた事は非常な喜びとしなければならぬ。即ち後走者
が前走者に近づいた時、掛聲に依つて前走者に道を譲らし
め、又は前走者自ら道を潔く譲つて、レースを極めて心地
よく行ひ得たと云ふ事である。スキー競技の進歩と共に、
かゝるスポーツマンライクのレースが先づ一分おきの出發
法より開かれて來たと認める事が出来る。

一着の片桐君のタイム四分二五秒は、從來のレースの
記録に比して甚だ優秀なレコードである。今度の一〇キロ
コースの正確なる距離は九キロ弱と云ふ事になつて居たの
であるが、従つて一キロ平均速度五分強と云ふ事になる。之
を歐州レコードと比較する爲に一例を引いて見れば、昨年
のスイエーデンの「ウन्दローメンデーの十六歳—十六歳組競走」
一等五分一二秒、二等四分九分三四秒等に比較すると、五分強
對四分半位の相異が一キロに就いて現はれて居るのを知る
事が出来る。一昨年の小樽の一キロレース一等五分五十九
秒に比すれば非常な進展を見せて居るが、猶先進國のレコ
ードに近づくには今暫く一段の努力の必要な事か知れる。

第二日目ジャンプ競技

廣田戸七郎

二月一日(日曜日) 午前一〇時半開始
天候 西風強烈、時々降雪あり寒氣強く概して不良状態
にありき。

参加人員 三十四名

三回不倒者 五名、二回不倒者五名、一回不倒者五名、

三回轉倒者 一九名

斜面狀況 使用ジャムビンゲヒルは當部附屬ジルバアシ
ヤンツエにして、斜面積雪良質なりき。

出發點は別に指定せざれども圏外線はジャンツエ端より
七〇米の個所に設けたり。

最長不倒距離 一六、三〇米 (小樽商業 岡田三郎)

最高得點 一七點七一 (小樽商業 岡田三郎)

次に入選せる選手の成績を示せば次の如くなる。

No.	Name	1st. jump				2nd. jump				3rd. jump				Chiefaward in Jump.	Note			
		Style	Award inLength	Average Award	Meters	Note	Style	Award inLength	Average Award	Meters	Note	Style	Award inLength			Average Award	Meters	Note
1	岡田(樟南)	16	20	18	16.3		14	19.48	16.74	15.4	直滑降懸	17	19.27	18.13	15.10	Landen 一足	17.62	
2	三澤(丸鐵)	14	17	15.5	10.5	直滑降着 陸懸シ	13	17.58	15.27	11.7	前回ヨリ 懸シ	11	17.29	14.14	11.2	踏ミ切り フライト 懸シ	14.97	
3	後藤(同上)	13	18.26	15.62	13.0	直滑降着 陸懸シ	10	17	13.5	11.5	滑ヲ スキテ 前 ニカ カス	9	17.73	13.36	11.9	欠脚ガ テ	14.16	
4	末武(樟中)	10	19.21	17.6	14.8	Landen 特ニ危シ	8		8	f		18	18.26	18.14	13.1		14.58	
5	北岡(丸工)	13	17.04	15.02	10.7	Landen 懸シ直滑 降特ニ懸	12	18.06	15.03	12.8	直空中着 陸共ニ欠 脚多シ	5		5	f		11.68	
6	武田(丸脚)	5		5	f		11	17.48	14.24	11.4		11.7	17.27	14.13	11.1		11.12	

T. Hirota
Judgeman.

No.	Name	1st. jump				2nd. jump				3rd. jump				Chiefaward in Jump.	Note			
		Style	Award inLength	Average Award	Meters	Note	Style	Award inLength	Average Award	Meters	Note	Style	Award inLength			Average Award	Meters	Note
1	岡田(樟南)	14	20	17	16.3		15	19.48	17.24	15.4		15	19.27	16.63	15.1		16.96	
2	三澤(丸鐵)	14	17	15.5	10.5		15	17.54	16.27	11.7		13	17.29	15.14	11.2		15.60	

3	安藤(札幌)	14	18.25	16.25	13.0		12	17	14.5	11.5		10	17.73	13.80	11.9		14.82
4	末武(標中)	15	17.21	19.21	14.8		8	—	8			18	18.29	18.14	13.1		13.08
5	北岡(札幌)	14	15.04	17.04	10.7		15	18.06	16.53	12.8		8	—	6	5		13.19
	(武田(札幌))	8	—				14	17.48	15.74	11.4		15	17.27	16.13	11.1		11.96

N. Ogata
Judgeman.

No.	Name	1st. jump					2nd. jump					3rd. jump					Chief award in Jump.	Note
		Style	Award in Length	Average Award	Meters	Note	Style	Award in Length	Average Award	Meters	Note	Style	Award in Length	Average Award	Meters	Note		
1	岡田(標高)	16	20	18	16.3		15	19.48	17.24	15.4		15	19.27	17.14	15.10		17.46	
2	三澤(札幌)	14	17	15.5	10.5		16	17.54	16.77	11.7		15	17.29	16.15	11.2		16.16	
3	後藤(札幌)	16	18.25	17.13	13.0		15	17	15.5	11.5		19	17.73	14.87	11.9		15.17	
4	末武(標中)	17	19.21	18.11	14.8		7	—	7	f		19	18.29	18.65	13.1		14.59	
5	北岡(札幌)	14	17.04	15.52	10.7		16	18.06	17.03	12.8		7	—	7	f		13.18	
6	武田(札幌)	6	—		f		15	17.48	16.24	11.4		14	17.27	15.63	11.1		12.29	

N. H. Hiratsuka
Judgeman.

此結果各入選者の決定成績點は次の様になる譯である。

- 一等 岡田三郎(小樽商業) 一七、七一
- 二等 三澤一次(札幌鐵道) 一五、六一
- 三等 後藤總次(同) 一四、七一
- 四等 末武久(小樽中學) 一四、一一
- 五等 北隅四郎(札幌工業) 一二、六八
- 六等 武田好明(札幌師範) 一一、九〇

更ジャムプの全体の成績を考へて見んに

1915 1/2	ラケット	飛躍數	不倒ジャムプ(%)	不倒飛躍平均距離
参加校	1	33	33.3	10.5
	2	34	26.4	12.3
12	3	34	35.3	11.5
總平均	3	33.7	31.7	11.4

更に昨年の優勝者秋野君を引合ひに出して、今年の優勝者岡田君との成績表を見ることは、ルールが變更せられたと云ふ點からしても亦、ジャムピングヒルが變つて居る點からしても無意味の様であるが、將來の爲に何か益するところがあるかも知れぬから、一寸簡單に表によつて比較して見やう。

時	日	天候	斜面の状況	飛躍不倒距離(m)	設定點	フーコナー
1924	27/1	晴天	良好	12.8	13.75	秋野武夫(樟中)
1925	1/2	降雪	良好	16.3	17.71	岡田三郎(樟商)

備考 20點滿點ニ換算セル飛點

次にジャムプテクニクスの方面から、特に全體に涉つて著しく吾々の目についたことを記して見やう。

(一) スタートの位置を一定しなかつた爲に大部分のジャムバアが、アプローチの滑走距離を短くとり、爲めに飛躍距離が貧弱であつたこと。

(二) 各ジャムバアのスキーが餘り滑らなかつたこと、甚だしいのになると全く塗蠟して居らぬか様に見受けられたものもあつた。これはジャムプでは最も忌むことであるスキーが滑らなかつたことは、また飛躍距離を縮めた原因にもなつたであらう。

(三) もう一つ飛躍距離の短かつた理由に、サツツの方法の會得が充分をあけるこゝが出来ぬ。

(四) 更にスタイルの採點に餘りとははれ過ぎた故か遠距離に飛ぶに云ふことが輕視せられて居た。これは一面ジャムプの發達を阻害するやに考へらるるが、それは大きな誤れる考察でスタートの位置さへ決定せられ、又遠くへ飛んで立つためには立派なスタイルが第一の必要條件であるこ

を考へることが出来るならば、容易に理解することの出来る事柄である。

(五) 全體のジャムプ滑走の要領は、兎も角呑み込まれて来たやうであるが、未だ練習不足と云ふか、ジャムプ修得年限の若い故と云ふか、確實性といふことから見るならば決して全體のスタイルが良好であると言ふことは出来ない特に著しい缺點は、サツツとランディングの姿勢にあつたサツツの動作が殆んさ凡べて鈍い。全く單に臺の端から滑り落ちるに過ぎないやうな誤つたサツツの方法をして居るのが特に目についた。ランディングでは最も安定なテレマックジツツエンに移ると云ふのは極く稀で、大部分兩脚を一足に揃へて立つて行くと云ふのが多かつた。これももう少し遠くへ飛ぶやうになると、お互にいけないことに氣がつくと思ふ。

尙アブローチの姿勢に於ける兩手と体の屈し方と云ひ、腰の下ろし加減と云ひ、又フライトに於て兩腕の廻轉動作と體の前傾の仕方と云ひ、スキーと體との均衡のとり方と云ひ、なか／＼小さい點に涉つて考へるならば、非常に研究の餘地のあることを知つて頂きたいと思ふ。

終りに又來る年までに一段の進境を望むと共に、今度の大會で各校の出場選手諸君が烈しい風にも怖氣すに、殆んど凡てのジャムプバアが三回共男々しく競技を續行せられ

たこと、非常にスポーツマンライクに極めて緊張裡に競技を終始せられたことを感謝して筆を擱きたいと思ふ。

彙報抄錄

全日本スキー聯盟の成立

全日本スキー聯盟設立の議が提稱せられたこと、及びその規約案全文は前號所報の通りであるが右創立發起團體の會合は第三回全日本スキー撰手權大會の開催を機として、二月十二日大鰐町に於て開かれた。

發起人より交渉した發起團體中、本會議に代表者の出席したものは次の通りである。

- 内山 數雄 (樺太中央スキー俱樂部)
- 三瓶 勝美 (札幌スキー俱樂部)
- 後藤 一雄 (北海道帝國大學スキー部)
- 黒崎 三市 (小樽スキー俱樂部)
- 白鳥 恒雄 (小樽高等商業學校スキー部)
- 高橋 次郎 (東北帝國大學スキー部)

武井群 嗣 (青森縣體育協會スキー部)

松木喜之七 (長岡スキー俱樂部)

鶴見宣信 (高田スキー團)

大林薪治 (砂高スキー俱樂部)

中川新 (早稻田大學スキー部)

柿村敬二 (東京帝國大學スキー部)

木原均 (京都帝國大學スキー部)

金井勝三郎 (六甲スキー俱樂部)

以上の他發起人側より佐々木新七、櫻庭留三郎、廣田戸七郎、加納一郎出席、午後三時より會議を開き、先づ佐々木氏開會の挨拶ありて後、議長選舉を行ひ、滿場異議なく鶴見氏を推薦し、發起徑過につき加納一郎氏の報告あり、次で愈々規案を附議、遂條審議を進め、第五條を除くの他二三字句の修正を行ひたる外大体原案を可決せり。たゞ第五條は「本聯盟ハ事務所ヲ東京市ニ置ク」この修正案出で之を議決によりて決定することを避けんが爲本條に關して更に翌十三日夜會議再開の上懇談することとし、尙高田スキー團より常務委員組織を更めて幹事長一名を代表委員會に於て選舉し、幹事を囑託して事務に當らしめ、會長を置かざる組織となし、經費負擔を議決權に比例せしむる等の修正案出でたるも、いづれも否決せられたり。

次で十三日午後七時より再び參集、懇談を試み發起人側

より原案の趣旨を更に累説し、會長の所在地は東京市とるに相違なく、従つて東京市が事實上本部たることを述べたるに對し、之が趣旨を規約條文に明示することとなり、前記修正案を廢して、第五條は「本部ヲ東京市ニ置キ、事務所ヲ札幌市ニ置ク」と修正しては如何との提案あり、滿場意義なく之に同意し、此處に初めて全文の審議を終り、聯盟規約成立と同時に、發起團體は直ちに加盟し、尙豫め發起人迄希望申出の左記團體の加入を承認することとなれり。

法政大學スキー部

弘前高等學校スキー部

戸山學校スキー團

稻門俱樂部

尙後より成立の報を聞き、三菱美唄スキー部亦加入申込をなし之又承認せられたり。

而して右成立後差當り本年秋季定期代表委員會までの常務委員を選任し、發起人中より廣田戸七郎、加納一郎、西澤勝次の三氏を推薦方提議あり、異議なく可決。次で會長候補者決定に關しては發起人に於て原案作成の上、承認を得ることとなし、本件に關しては翌日打合の結果第一、第二、第三候補者を決定、加盟各團體の同意を得て常務委員より交渉、決定の上發表することとなつた。

尚右會議終了後、樺太堀氏より第四回全日本選手権大會の開催地を樺太とすべく、希望を繰述せられ、本會議に於て右決定方懇願せられたるも、熱烈なる希望を諒承するにとどめ、右決定は規約案により本年十月開かるべき代表委員會に於てなすべき旨意見一致し、午後十時散會せり。

次で同選手権大會閉會式後、會場に於て直ちに聯盟發會式を舉行せられ、佐々木新七氏開會の挨拶あり、加納一郎氏設立經過報告をなし、加盟團體を發表し、尙常務委員を代表して挨拶するところあり、續いて稻田男爵は本聯盟の健全なる發達を、本邦スキー界に對する努力とを要望する旨祝辭演説ありて式を閉つ。

右全日本スキー聯盟本部は取敢ず東京市京橋區宗十郎町大日本體育協會内に、事務所は札幌市北六條西六丁目に置く事に常務委員に於て打合せたり。

北大スキー部一九二四年度 スキー競技會成績

大會開催日 一月一八日
場 所 三角山山麓
競技種目 一六キロデイスタンスレース
四キロデイスタンスレース
ジャムブ競技A、B、二組
一八日午前九時競技開始 天候午前中曇時々晴

一、四キロレース 雪質絶好

一着 岡村源太郎 タイム 二分二四秒半

二着 青山 馨
二、午後一時ジャムブB開始 雪質絶好、ジャムピング
ヒル規模全體小

一等 小山田猛夫 レコード八米

二等 岩森秀夫

三、午後二時一六キロレース開始、雪質絶好
競技法 一分隔スタート法を執行し、前走者超走の際に
バインフライの方法をこり、實際に成果を擧ぐるを得たり
他は凡べて當部競技規定による。

第一着 岡村源太郎 タイム 一時間二四分

第二着 小海 鼎 第三着 徳田御稔

本日午後に入り天候曇り勝となり剩へ疾風の爲ジャムブ
Aを決行するを得ず延期す。

二月廿二日 ジャムブA組競技舉行、天候曇、時々晴南
西風強烈なりき。當部所屬ジルバアシャンツエにて開催。
斜面状況良好。

競技法 當部競技規定による。スタート地點一回中段、
二回最頂點に定む。午後一時競技開始

結果

一等 村本金彌 得點 一五、〇二

二等 青山 馨 同 一一、八四

三等 伴 素彦 同 一〇、五八

最長不倒距離レコード 二八、二〇(村本金彌)

午後二時半終了。

日本スキー団体總覽 [一]

一九二五年一月一日現在

照會事項

様なものが若しあるとするとそれを人間が遂行すること。

三、六十名。

四、會員に差別がない。會費は學友會の會費から出る。

五、學生及び大學關係者。

六、互選、一ヶ年。

七、仙臺市片平町東北帝國大學スキー部

八、田中館秀三。

九、高橋次郎。

一〇、毎年十二月廿日頃から一月初旬まで

宮城縣峨々温泉に於て講習會を行ふ

二、スノークラフト。登山に適するスキー技術の研究。

二、スキー、山岳等に關する研究及指導

及同目的のための旅行、學術講演會

映畫會等

三、會員數約一百名

四、本學々生及關係者

五、本學々友會々員

六、推薦、任期一ヶ年

七、校内第二學生控所内スキー山岳部室

八、末弘嚴太郎

九、常務委員、平井左内、古谷孝一、仙

波正雄、吉村俊一、川上俊秀、中田直

一〇、冬期休暇中に於ける練習會毎月一回

の研究會又は講演會、五色に於ける

スキー小屋の設置、内外各地スキー

團隊との連絡。

二、登山術の研究、スキー術の研究

慶應義塾體育會山岳部

一、一九一五年五月

二、登山の爲にスキー術を習得せんとす

三、約百名

四、一

五、慶應義塾學生たる事

東北帝國大學スキー部

一、一九二四年四月

二、スキーそのものが有する目的と云ふ

東京帝國大學學友會

スキー山岳部

一、一九一八年十二月一日

- 六、幹事五名、任期一年。
- 七、東京市芝區三田慶應義塾内
- 八、田中三晴、西川不二雄
- 九、本郷常幸、中村邦之助
- 一〇、冬春兩期に講習會を行ふ
- 二、

大阪醫科大學スキー部

- 一、一九二二年十一月十四日
- 二、人格の陶冶、体力の充實、山及雪に對する科學的研究
- 三、五十名
- 四、普通會員、特別會員、贊助會員、年六圓
- 五、本大學々生、生徒、職員その他關係者
- 六、互選、一ヶ年
- 七、大阪市西區靱南通一丁目一三、小林太郎氏宛
- 八、常務者之を兼ねぬ
- 九、小林太郎、水野祥太郎、巽稔
- 一〇、年々十二月中は伊吹山にて一月及び三月は越後田口にて講習會を開きつゝあり。目下敦賀附近にてスキー場

設備の計畫あり。

- 二、山嶽に對し實地に應用せらるゝスキー術の研究。目下平地スキーより山嶽スキーに對して技術上の進展を見んとする傾向あり。

専修大學スキー部

- 一、一九二〇年五月十日
- 二、山スキー
- 三、一二六名
- 四、普通會員(本學生及附屬商業)特別會員(校友)會費
- 五、本學々生及び校友。
- 六、選舉法、一年
- 七、東京神田専修大學スキー部
- 八、部長濱田楠治教授
- 九、小林六郎
- 一〇、(1)十二月、三月。(2)新潟縣東歌城郡松立山温泉スキー場に於て各地方青年小學生の大會。
- 二、スキーのビンディング、器具及裝身具に就て。

明治大學學友會山岳部

- 一、一九二二年六月一六日
- 二、心身の鍛鍊。山岳及スキーの研究
- 三、七十名
- 四、名譽部員、普通部員、會費なし、維持は學校よりの補助による。
- 五、本校學生及校友學校關係者
- 六、部員選舉、一ヶ年
- 七、東京神田駿河臺 明治大學々友會山岳部
- 八、神宮德壽
- 九、上田謙之助、新田義美、磯部照幸
- 一〇、スキー講習會は十二月或は一月及三月に一週間から十日間、主催競技會なし、部内大會のみ。計備只今なし
- 部内雜誌發行、寫眞展覽會等
- 二、山岳及スキー。山へ行く關係からフチームより確實性への傾向あれどもはつきりとはお答へ出來ず。

學習院補仁會山岳部

- 一、一六一七年
- 二、登山を目的とするスキー術の研究

- 三、約百名
 - 四、在學生（輔仁會々員）及卒業生、輔仁會々費
 - 五、前項に同じ
 - 六、在學生中より輔仁會々員の選舉による三名、任期一ヶ年
 - 七、東京目白學習院、輔仁會山岳部
 - 八、渡邊八郎教授
 - 九、一
 - 一、毎年十二月下旬約一週間講習會を開く、積雪季山岳登山
 - 二、冬季山岳に於ける登山法の研究、スキー競技には絶対に參加せず
- 第一高等學校校友會旅行部**
- 一、一九一八年
 - 二、一般一高生をしてスキーをやらせる
 - 三、不定
 - 四、種別なし、會費は校友會費の中旅行部々費
 - 五、第一高等學校生徒
 - 六、前委員選定、任期は一ヶ年

- 七、第一高等學校旅行部
 - 八、黒河龍三教授（部長）
 - 九、委員三名、佐藤捨三、鹽川三千勝、安藝悌一
 - 一〇、春、冬期休暇中の練習合宿、競技會其他なし
 - 一一、主なる研究事項なし、技術上の傾向としては特書すべきものなきも西歐の新知識を基礎として日本の雪に適する技術を勵む。
- 第二高等學校スキー山岳部**
- 一、一九二二年十月
 - 二、學校生徒に冬期の活躍をすすめ進んでは冬期登山の趣味を助長し以て當地方に於けるスキーの先導をなさんとす。
 - 三、尙志會員全部
 - 四、一
 - 五、第二高等學校生徒及び職員
 - 六、前年度委員の推薦による任期は一年
 - 七、第二高等學校内
 - 八、二高尙志會山岳部委員スキー係

- 九、全委員
 - 一〇、追て蔵王山に理想的滑走場を造らんと計畫中
 - 一一、講習は毎年十二月休と三月休みに合宿指導をなす
 - 一二、主としてスキーによる登山
- 第三高等學校嶽水會山岳部**
- 一、一九二三年四月
 - 二、積雪期に於ける登山
 - 三、部員約三十名
 - 四、一
 - 五、一
 - 六、一
 - 七、京都市吉田町第三高等學校内
 - 八、部長
 - 九、理事、今西錦司、渡邊漸、高橋健治、桑原武夫
 - 一〇、冬期及春季休暇に關温泉にて講習會を開く
 - 一一、一

第四高等學校旅行部内

スキー部

- 一、一九一七年一月一日
- 二、始め体育によりスキー登山の目的となる、現在登山、体育
- 三、五十六名
- 四、
- 五、旅行部員
- 六、部員中よりマナーシヤールこれを選定委任す。(二名)任期一ケ年
- 七、金澤市長町四番町二十一旅行部塾内
- 八、中村正雄、深井浩三
- 九、全
- 一〇、毎年十二月末より向ふ一週間關温泉にて講習會を開く、一月競技會を行ふ、スキー場不完全ながらあり。
- 二、アルパインスキー術、スポーツと登山との傾向

第八高等學校山岳部

- 一、一九二三年四月一日(校友會となりし日俱樂部としては大正十一年)
- 二、山岳部の一部としてスキーを開催す

スケートも舉行し度し(夏期は登山

一月、三月はスキー)

三、約三十名(變動あり)

四、區別なし

五、本校生徒

六、相互選

七、第八高等學校山岳部

八、

九、西山參次

一〇、例年は赤倉附近、本年より關山温泉

附近

二、

松江高等學校スキー部

- 一、一九二四年二月一日
- 二、スキーに關する諸般の事項を研究するを以て目的とす。
- 三、四十八名
- 四、正部員と準部員
- 五、正部員は松江高等學校生徒職員卒業生、準部員部に特別の關係ある者
- 六、委員は部員の互選任期一ケ年、部長は委員會の推薦、任期は別に之を定

めず。

七、松江高等學校内松江高等學校スキー部

部

八、部長清水吉之助

九、委員松本健一郎、松田健壽、久保俊夫、山中三郎、岡藤哲三郎、入江亮

檜崎寅一

一〇、第三回講習會を終えたる處

二、軟雪に對する研究

山形高等學校校友會

スキー部

- 一、一九二〇年九月
- 二、會員の親睦を厚うし心身の修養を圖り校風を振作することを以て目的とす
- 三、職員生徒全部(約六百五十名)然しスキーの練習をする者略百五十名
- 四、
- 五、職員及生徒
- 六、生徒の互選、任期は一年
- 七、山形市山形高等學校
- 八、校友會スキー部長勝川全道

- 九、委員吉田六三、齋藤一雄
- 一〇、校内練習場其他年末、年始の休暇には合宿練習を行ひ市外平野山にて二月初め大會を行ふ

新潟高等學校々友會

スキー部

- 一、一九二〇年三月十二日
- 二、一般練習及競技を目的とす
- 三、
- 四、
- 五、新潟高等學校生徒
- 六、スキー部委員として學校一般より四人を選出す、一年。
- 七、新潟高等學校スキー部
- 八、今の所未定
- 九、今の所未定（改選期につき）
- 一〇、十二月、三月と兩休暇に講習を行ふ
- 一一、一般スキー術、競技目的のスキー術

山形縣師範學校酬志會

スキー部

- 一、一九二四年三月
- 二、スキーにより運動の本旨に達せんとす、兼ねて實用化の計らんとするにあり。

三、全校生徒（四九六名）

- 四、幹事、委員、會員、酬志會費さす
- 五、本校生徒に限る
- 六、選舉により一ケ年
- 七、山形縣師範學校酬志會スキー部
- 八、久保田幸次郎（幹事）
- 九、黒田毅（部長）
- 一〇、講習會年一回一週位、競技會一回、スキー場双月スキー場固定ジャンプエ有、縣主催スキー大會、日本スキー大會豫選會に選手を出す。
- 一一、ジャンピングノールエー式に統一する傾向

北海道帝國大學文武會

スキー部

- 一、一九二二年七月一日

- 二、文武會會則の示すところに従ひスキー技術、冬季登山の充分なる研鑽とその普及發達をはかり併て部員相互の親睦をはかるを以て目的とす。

三、三百名

- 四、本學教官學生、生徒、部費一圓
- 五、本學教官、學生生徒
- 六、部長推薦による方法、任期一ケ年
- 七、北海道帝國大學文武會スキー部
- 八、大野精七
- 九、主任幹事（第一四シーズン）平塚直秀
- 一〇、部員の合宿練習、部員の競技會、全國中等學校スキー競技大會主催
- 一一、一般スキー術、スキー競技冬季スキー登山の合理的研究

青山温泉

優良なるスキー地を以て知られたる
設備の完全を以て知られたる

五色温泉

宜き宿りも有す。

一室の温泉に由来する計りの温泉

計りの温泉に由来する計りの温泉

計りの温泉に由来する計りの温泉

計りの温泉に由来する計りの温泉

計りの温泉に由来する計りの温泉

東京より九時間にて達す。
奥羽本線板谷驛より近し。

山形縣南置賜郡山上村板谷

一里半

温泉

温泉

青山温泉

正

スキー地として重要な条件で
ある所の雪質、雪量、地形等
皆充分に恵まれてゐる當温泉
は、年來の経験によつてスキ
ー家の爲に出来るだけの御便
宜を計ります。

泉



函館本線昆布驛より一里半

札幌より五時間

函館より七時間

山形県南陽郡湯野山土林温泉

GET SUPERFINE SKEES.
 AND MAKE AN
 EXCELLENT
 RECORD!

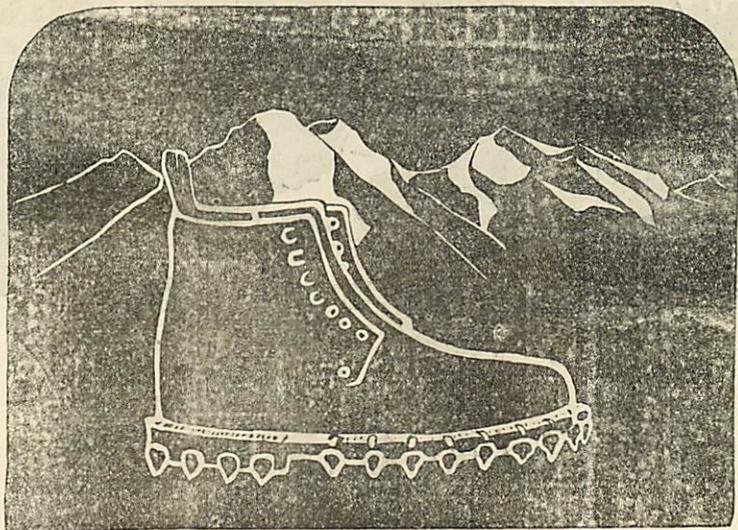


東京市本郷區四丁目角

優秀ナルスキート其用具

小樽

梅屋運動具店



靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たるる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願いします又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、ゝ、を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C.G.S. 係によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定 價

金參拾錢

*前金御申込が、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願い致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

大正十四年二月二十八日印刷

大正十四年三月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯兼印刷兼發行者 佐々木 政 吉

札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
 de la
 Monta kaj Skia Klubo
 No 47. Marto. 1925. Sapporo. Japanujo.

美 滿 津 ノ
 ウ ン タ ー ・ ス ポ ー ツ
 各 種 用 具



合 名 會 社

美 滿 津 商 店

東 京 ・ 本 郷 ・ 赤 門 前

大正十四年三月一日發行
 大正十四年二月二十八日印刷
 大正十四年七月二十七日第三種郵便物認可

山ノスキー 第四十七號

定價金參拾錢